転載・二次使用禁止

東日本大震災による福島第一原発の事故の影響で、今も多くの人が県外で避難生活を送っている。その避難先の学校で、子供たちが受けたいじめが相次いで発覚している。福島県出身であることや避難者であることを揶揄する暴言と暴力の数々。これ以上の災厄を防ぐために今、できることは――

バラすぞ！ 靴を便器に ほか――

原発避難いじめ全内幕

どうしてウチの子が…母が告白

「天国に行けますように――」

七夕の短冊にこう願いを書かずにおれなかった田中亘くん（仮名）の孤独と苦しさはいかばかりだったか。

亘くんは11年3月11日の東日本大震災による福島第一原発事故後、住んでいた福島県から東京に避難した後、転入した小学校のクラスメートからいじめを受けた。

亘くんの母親・聡子さん（仮名）が振り返る。

「小学校に転入した直後から〝福島の奴は変な奴だ〟と言われて、隣の子が机の下から鉛筆で足を突っついたりしたそうです。朝になるといつも息子の体調が悪くなったけど、当時は震災直後のストレスが多い生活で、なかなか気づいてあげられませんでした」（聡子さん）

福島県から県外に避難している人は今も4万人近くおり、うち都内では約5100人が避難生活を続ける。住み慣れた故郷を離れて新生活を始めた子供たちが「原発避難いじめ」を受けていたことが震災から6年経った今、次々と発覚している。

2月27日、原発事故の避難者を支援する「東京災害支援ネット」の山川幸生弁護士らが会見を開き、原発事故後、福島県から東京都千代田区に自主避難した子供3人が学校でいじめを受けていたことを明らかにした。

「福島から避難して学校でいじめられた子供たちはつらい思いをしていても、〝お母さんに心配をかけたくない〟と黙っているケースが多い。それでも横浜の件が報じられ、勇気を出して真相を告白する子供が増えているんです」（山川弁護士）

昨年11月、神奈川県横浜市に自主避難した中学1年生の男子生徒が、小学生の時に同級生からいじめを受けていたことが報じられた。名前に「菌」を付けて呼ばれたり、「放射能」と呼ばれたりしたという。さらには、「賠償金があるだろう」と言われ、ゲームセンターで遊ぶ金など総額150万円を支払わされた。巨額の金銭授受にもかかわらず、「いじめと認定するのは難しい」と発言した横浜市の教育長が世間に批判され、のちにこの教育長がいじめを認定するなど当局の対応は二転三転した。

「娘は心配をかけたくないと黙っていた」

冒頭の亘くんも声をあげた1人。震災直後にいじめを受け、この時は学校側からいじめの存在を告げられ、「一度リセットしよう」と転校した。その甲斐あって、しばらくは平穏な生活が続いたが、再びいじめは始まった。

「転校した時に、全校生徒の前で〝福島から避難してきた〟と紹介されたことも原因だと思います。クラスメートから〝菌がうつる〟と馬鹿にされたり、クラスで班を作るときに机をつけてもらえなかったりしたそうです。息子が何か言い返すと暴力を振るわれることもありました」（聡子さん）

そして迎えた七夕に、亘くんは冒頭のように「天国に行けますように」と短冊に綴る。それを見た聡子さんは初めて事の深刻さに気づいた。

「当時は息子が自殺するのではないかと本当に心配だったので、〝死んだら天国に行けないんだよ〟と諭しました。私自身、子供のころにいじめられた経験があって息子のつらさがわかったので、震えが止まるまで抱きしめることしかできなかった。一度転校して失敗していたので、2度目の転校は考えられませんでした…でも、早く転校させて息子を助けてあげればよかった。そこまで息子を追い込んでしまったことは今も悔やまれます」（聡子さん）

まだある。富田恵さん（仮名）も原発事故直後に福島県ともありました」（聡子さん）

13年4月から担任になった教師の尽力で、ようやく校内でのいじめは収まったかに見えたが、実は担任の目が届かない場所で、いじめは巧妙に続けられていたという。

「今度は息子の通う塾でいじめられるようになりました。ペットボトルにインクを入れられて〝飲め〟と強要されたり、履いていた長靴をトイレの便器に捨てられたりしました。この頃、息子はいつも泣きながら家に帰ってきていましたが、理由を聞いても答えませんでした」（聡子さん）

そして迎えた七夕に、亘くんは冒頭のように「天国に行けますように」と短冊に綴る。それを見た聡子さんは初めて事の深刻さに気づいた。

「当時は息子が自殺するのではないかと本当に心配だったので、〝死んだら天国に行けないんだよ〟と諭しました。私自身、子供のころにいじめられた経験があって息子のつらさがわかったので、震えが止まるまで抱きしめることしかできなかった。一度転校して失敗していたので、2度目の転校は考えられませんでした…でも、早く転校させて息子を助けてあげればよかった。そこまで息子を追い込んでしまったことは今も悔やまれます」（聡子さん）

まだある。富田恵さん（仮名）も原発事故直後に福島県

●伊藤隼也（医療ジャーナリスト／写真家）と本誌取材班

横浜だけじゃない！ 放射能バンバン

から千代田区の小学校に入学したひとり。'13年ごろから深刻ないじめが始まった。

恵さんの母親の好美さん（仮名）が振り返る。

「朝になると、頭が痛い〟と言って登校したがらなくなりました。やがて学校も休みがちになり、いくつかの病院で精密検査を受けても異常はなかったけど、最後に行った病院で〝心の病気です〟と診断されました」（好美さん）

驚いた好美さんが問い詰めると、恵さんは「実はいじめられていた」と徐々に重い口を開くようになったという。

「思いもよらなかったので、もうショックで…。同級生の男の子らがピストルのポーズをしていきなり娘を指差し、〝放射能バンバン〟と言って逃げ去ることを毎日のように繰り返したそうです。娘は私に心配をかけたくないからとずっと黙っていました。詳しい内容を話すようになったのは最近になってからです。病院なんかに行かせずに、私がもっと早く娘の気持ちに気づいてあげられればよかったんです…」（好美さん）

真実を知った好美さんが学校にいじめを伝えても担任は「加害児童に伝えたから、もうしないと思う」と言うのみ。担任と学校を信頼できない好美さんは恵さんを転校させた。

好美さんは、「なぜ、うちの子が」と唇を噛みしめる。

「娘の将来を思って放射能のリスクを避けるために避難生活を続けています。でも、結局、福島を理由にいじめられて本当に残念です。子供が〝放射能〟という言葉を使うとは考えられないので、親御さんたちが話すのを聞いて使ったのでしょう。何も悪いことをしていない娘が福島出身というだけでいじめられて、悔しい思いでいっぱいです」

そう言うと、好美さんは記者の前で嗚咽をもらした。

怒りで震える教室

「区教委は真相解明にあまりに消極的」

怒りで震えるようなこの事態。千代田区内だけで見ても、いじめは亘くんと恵さんに限らない。

山川弁護士によれば、「福島から避難してきたやつは中学までしか生きられないから今死んでも同じだ」とクラスメートに言われて階段から何度も突き落とされたり、「避難者だとバラされたくなかったらおごれ」と金銭を要求されたりするケースもあったという。

2月下旬、山川弁護士らは亘くんと恵さんを含めた3人のいじめを千代田区内の小学校と千代田区教育委員会に通報した。

今後、千代田区教育委員会がいじめの実態を調査する予定だが、山川弁護士は区教委の姿勢をこう批判する。

「すでに調査を開始した今回とは別の1件について、教育委員会は当初、被害者への聞き取り時間は1時間だけ行うとして、弁護士の同席は認めるけれど発言は許さないと主張しました。

われわれの抗議で〝2時間程度は聞き取り調査を行う〟と言うようになりましたが、真相を解明するにはあまりに消極的な姿勢で被害者側の保護者と対立しています。しかも教育委員会は被害者が聴き取り調査に要望を出すと調査が遅れるという理由で被害者から事情を聞く前に加害者側の話を聞く姿勢を示しており、言語道断です」（山川弁護士）

調査に消極的なところか、区教委の指導主事からは耳を疑うような発言があったと山川弁護士が続ける。

「非公式の場ですが、〝被害児童には虚言癖がある〟〝被害児童の保護者が調査に消極的だ〟と発言したというのです。被害者本人や保護者はいじめ防止対策推進法などに基づく正当な調査を求めているのに、教育委員会の対応には誠意が全く認められません。心に深い傷を負った子供たちのためにも、真摯な対応が求められます」（山川弁護士）

山川弁護士の主張に対して、千代田区教育委員会の担当者はこう回答した。

「調査方法については先方の代理人とやりとりしているところですので、コメントは差し控えさせていただきます」

「被害児童には虚言癖がある」などと発言したとされる件については「そのような事実はなかったと認識しています」と否定した。

原発事故前、亘くんには植物学者になるという将来の夢があった。

だが、都内に避難して学校でいじめられるようになってから、「夢なんかない」と語るようになったという。

原発事故から6年。遠のく震災の記憶とは正反対に、今なおそのことで傷つけられている子供たちがいることを決して忘れてはならないし、子供たちにどんな言葉をかけるべきか、大人の責任は重い。